園長通信～こころ～ №２７

翻訳力

2024.5.15

先日、久しぶりに中学校の先生方の前で９０分間、お話をさせていただいた。居心地はわるくはなかった。どちらかというと、しっくりくる。まだまだ、幼稚園の方が落ち着かない。だからといって、水を得た魚のように話したかというと、そうでもない。きっと、自分の中に多少の遠慮というものがあったのだろう。自分は、もう中学校の人間ではないという思いである。

毎度のことではあるが、翻訳がむずかしい。今回は、読解力、リーディングスキルがテーマだった。むずかしいことをむずかしく話すのは簡単である。先生方の研修会などでは、先生方が、平気で学びとか、見取るなどの教育用語を使っている。確かに、話していることは間違ってはいない。だが、本当にわかって話しているのだろうかと思うことがある。

リーディングスキルに関して、第一人者が主張していることを、そのまま伝えることはできる。役に立ちそうな資料を提示することもできる。だが、自分が理解できていないことは話さないようにしている。きっと話したとしても、相手には伝わらない。提示する資料にも解説が必要である。

むずかしいことをいかにやさしくできるか。やさしいことをいかにふかくできるか。ふかいことをいかにおもしろくできるか。話す人間の翻訳力が問われる。これは、授業も同じであろう。翻訳するには、自分が理解できていなければならない。

４月から、この翻訳という難題に直面している。相手は、４歳児、５歳児の子どもである。誕生会がある。誕生日の意味をどう伝えるか。こどもの日のつどいがあった。こどもの日の意義をいかに伝えるか。リーディングスキルよりも、はるかにむずかしい。子どもが理解できるであろう言葉を使って話す。かなり限定される。今までは、何気なく使ってきた言葉も、園児向けに変換しなければならない。これが、容易ではない。今のところ、さっぱりうまくいかない。

話というのは、小学４年生がわかるように話すのがよい。そう何かに書いてあった。相手が園児となると、さらにむずかしい。園児に向けて話すのは、今までの私であれば、特別なことだった。幼稚園の先生方は、毎日、この特別なことに挑んでいる。親御さんもそうである。皆さん、翻訳力が高い。

今のところ、園児向けの翻訳機は調子がわるい。先生方が使っている言葉を分析する必要がある。加えて、言葉も大事だが、話し方や表情が重要である。今までも、教員をしながら、常に翻訳ということを意識してきた。ここにきて、さらに翻訳のステージが上がるとは思わなかった。現実は、厳しい。園児たちは、翻訳力を鍛えてくれる天使のような存在である。